●春日部市民文化講座（第 23 回）　「茶の湯の器の美　ー瀬戸黒、志野、長次郎（楽）ー」

◆日時：2017 年 11 月 28 日(水)　11 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

■長次郎の茶碗

今日は茶の湯の器、茶碗の中で瀬戸黒と志野と長次郎についてお話します。**長次郎**というのは、利休さんが長次郎に出会って作らせた茶碗ですが、**長次郎の茶碗に関しては「楽」という言葉は使いません**。それは時代がずれるからなのですが、長次郎から15代までの樂吉左衛門まで楽家は続いています。皆さんもご存じだと思いますが**「一楽、二萩、三唐津」**と言われていますが、萩に行くと「一萩‥」になり、唐津に行くと「一唐津‥」と地域によって変わりますが、抹茶茶碗の好みの順です。長次郎の茶碗の前に、千利休は茶の器器として**瀬戸黒茶碗**を使っていたのですが、利休が生み出した「わび茶」に合う茶碗を利休が考案して手として造り出したのが長次郎なのです。これによって、**利休の作った道具、所作＝お点前、茶室というものが侘茶の中でぴったりと合い“利休好み”と言われるものになったのです**。利休さんの前にもお茶はあり、室町時代に名物と言われた茶道具は中国から渡ってきた道具でした。それを信長が集めて、本能寺でお茶会披露の最中に明智光秀の謀反により焼けてしまったのです。そこで利休は新たな美意識で創りだしていったのです。

瀬戸黒茶碗　銘「小原木」桃山時代

■美濃で焼かれた瀬戸黒と志野

それまでに利休が接した侘び茶の茶碗というのは、**長次郎と瀬戸黒**、それらとは黒と白のコントラストになる同じ美濃で同じ時代に焼かれた**志野茶碗**だったのです。この技術はどこから来たのかというと、百済などが滅んで李朝（1392-1910 年）になったときに海流に乗って越前などの日本海沿岸の土地に着いて、その土地の人たちに受け入れられて、その文化を伝えた**朝鮮系の陶芸技術を持った人たちであろうと考えられます**。瀬戸黒の凄さは、筒の中に入れて焼きますよね。そうすると真っ赤になりますが、頃合いを見計らって鋏でグッと取って水の中にジュワンと入れるのです。その塩梅によってこの漆黒の黒が出るか出ないかという茶碗なのです。ですから、この**瀬戸黒は桃山時代の陶芸文化の花と言ってもいいと思いますよ。志野もそうですが、志野で有名なのは三井美術館にある国宝「卯花墻」です**。この二つの茶碗は長次郎が出来る前に造られていたのです。この志野には日本人の感性と技術が見事に合体しているのだと思います。ですから、茶碗でこれが日本の心だよねと言えるのは、ぼくの好みで言えば第一が志野だと思います。次が長次郎の茶碗です。長次郎は純粋に日本人の心、すなわち利休さんの心がそのまま形に出たものです。

志野茶碗、国宝「卯花墻」、桃山時代～江戸時代

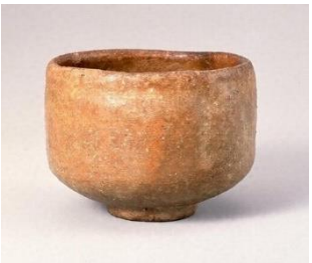
■長次郎はどこから来たのか？

長次郎については、昭和期の評論家である磯野風船子（いそのふうせんし、1902-1990 年）という人が朝鮮人だといい、林屋晴三先生（東京国立博物館名誉館員、1928-2017 年）が樂家に代々残る三彩釉の狛犬を鑑定して、三彩釉（写真：長次郎の残した最も古い作品は二彩獅子像、天正 2 年（1574）春）の技術を持っていたということで長次郎は中国人だと言っていたのですね。それを当代（15 代）の樂さんが中国人だと認めたので決着しました。ただね、長次郎と千利休がどこで出会ったのかということは今でも謎なのです。こんなに有名な人なのですが、どこで出会ったのかは謎なのです。ぼくは個人的には堺に行って学芸員の方たちに調べてもらったりした結果、ぼくはやっぱり堺に居た瓦職人だったろうと思います。堺で瓦を焼いていたことまでは分かったのですよ。ただ、長次郎がそこに居たという確たる証拠はないのです。

■瀬戸黒も志野も誰が造った物か分からない

千利休の文字として「小原木」と書かれた瀬戸黒があるということは、もっと注目される茶碗ですね。千利休が長次郎に茶碗を造らせる前に、この瀬戸黒を自分の侘茶に相応しいとしていたことの証拠なのですね。だから、利休さんが造らせていたかどうかも分からないし、当時の志野にしても瀬戸黒にしても造った人の名前が不明なのです。

職人さんの名前が分からないのです。ただ、利休の侘茶が確立して秀吉がそれを牛耳っている時期に、博多の商人で神屋宗湛(かみやそうたん)という人が利休の茶会に招かれたときに**長次郎の黒茶碗**でもてなしを受け、その後秀吉が来るというので茶碗を替えるのですが、その後秀吉が来るというので茶碗を替えるのですが、その時の利休の言葉として**「黒きに茶たて候事、上様(秀吉)御きらい候ほどに、此分に仕候」**といったと残しているのです。秀吉は何だか分からないけれども、この黒茶碗を嫌っていたので、秀吉の前ではこの茶碗は使われなかったのです。実は長次郎が千利休に所望されて造った茶碗は、はじめは赤だったのです。そして次に黒ができてきたのです。



長次郎作赤楽「太郎坊」

**■侘茶の完成に向けての瀬戸黒、志野、長次郎**

鎌倉・室町時代の茶の湯というのは、中国の文化、特に唐物が大切にされました。今でも唐物を使うというのは並大抵のことではないのですし、表千家の場合には唐物を使うお許しをいただいた人でなければ、唐物を使う場にも出してもらえないのです。そのくらい別格なのですね。今、唐物を使う真の台子でのお茶というのは表千家では誰にも教えていません。千利休が侘茶を確立していくときの初めに**瀬戸黒**がありました。これは、確かな技術と見識を持った朝鮮人が日本に逃れてきて、住み着いてちょうど良い土があった美濃で造った物です。同じ時期に、**志野茶碗**が生まれているのです。それを利休さんも使っているのです。この志野茶碗の姿というのは、雪がほんわりと土に被っている春特有の景色なのです。江戸時代に書かれた『南方録』では、藤原家隆が詠んだ**「花をのみ　待つらん人に　山里の　ゆきまの草の　春を見せばや」**が利休の侘びの心だと言っているのです。利休は今見えなくても、見る心があれば見えるんだよというのが侘茶なのです。そして、長次郎の赤が生まれ、黒が生まれてくるのです。この長次郎が造ったかせた茶碗は私の印象では土器です。

**■侘茶は千利休と周囲の人たちで完成した**

千利休が最初に長次郎に赤を焼かせ、後に黒を焼かせ、しかも手にあった手で包み込むと冬なんかは幸せな気持ちになる、ホッとするような茶碗を造らせたか。お茶を点てる方ももてなされる方も茶碗から伝わってくる温かさ、人肌ですよ、こうしたものが利休さんも好きだったのですね。茶碗についてぼくたちは何気なく「樂だよね」と言うのですけれども、樂の前に「瀬戸黒」ありきで、そして同時期に日本人の手で造られた桃山時代の花となる「志野」が生まれて、そして 2～3 年の間をおいて「長次郎」の茶碗が出てくるのです。だから、侘茶というのは利休さん一人では確立することができなかったと思うのです。名も無き陶工達がいて、長次郎がいて、そうした器を使いながら調和さしていき、利休七哲を中心としてこの当時の知識人たちと一緒に千利休さんは侘茶を完成していっただろうというのが、ぼくの最近の見解です。

**■土の器に命の風が吹き込まれて**

もう一つ、ぼくたち自身がとんでもない存在・肉体なのですね。ぼくたちは土から出来て土に帰るというのが、ぼくの専門の聖書の根本思想なのですよ。人間は塵から作られて塵に帰るのです。ぼくの所にお越しいただいた方に、「きょう出した道具の中で一番素晴らしかった道具は何だったでしょうか」ってお尋ねするのですよ。すると皆さんがいろいろなことを仰るのですが、「全部違うでしょう」と言うのです。**一番素晴らしい道具はそこに集まっているお客様なのです**。それは私たち自身が土の器だからです。少し前に『千の風の乗って』という歌が流行りましたが、あの**“風”という言葉はギリシャ語で“プニューマ”と言いまして、息吹、命、風を意味します。ですから、この土の器に本当に命が吹き込まれていなければ生きているとは言えない訳ですよ。**長次郎の茶碗が今でも尊重されるのは、ある茶碗に命が吹き込まれているからなのです。コピーではないからです。だから当代の樂吉左衛門さんは簡単に長次郎の真似をしないのですね。専門家の前で「長次郎の真似をしてもろくな物はできませんよ」と言ってのけてしまう人ですから凄いです。だから、ぼくたち自身が一度限りの人生を器として生かされるかどうかは命があるかないかです。命に感動があるかどうかですよ。こういう茶碗には、ぼくたちが使うことで命を吹き込んでやることができるのですよ。だから何と言っても、どんなに素晴らしい道具が出されたとしても、人間が一番でしょう。お家元の箱書きがある道具じゃなくても、**それを使っている人がその道具を愛してもてなす心、それは“コンパッション”ですよ。すなわちその人と喜怒哀楽を共にする、共に苦しみ、共に泣き、共に喜べるお茶会を千利休は確立した。それが千利休の侘茶で、その器が本日ご覧いただいたものだと言えるのではないでしょうか。**

今から 400 年前の茶碗を手にすることはできませんが、「温もりのある茶碗」というのは本当にご馳走ですね。